

赴任してきた。契約期間は四十三年八月三十一日まで、月給二百円が支給されることになった。しかし個人的事情により四十一年(一九〇八)七月二十八日付で依願退職した。

(八) ルドルフ・ロイテル Rudolph Ernest Reuter (一八八八?)

在職期間 明治四十二年～四十五年(一九〇九～一九一二)

嘱託講師

担当科目 唱歌、ピアノ

明治四十二年三月十一日付で東京音楽学校校長湯原元一はドイツ駐在官畑良太郎参事官にあてて「ドイツから唱歌の教師を求めたいが、ユンケルの我儘三昧の風下に立つのは好ましくないという理由で日本に来手がないのだが、ユンケルだって永久に東京音楽学校にいるわけでもなく、解雇出来る日も真近いので適当な教師を探してほしい」という内容の手紙を発信した。そしてこの求めに応じて来日したのがルドルフ・ロイテルである。彼はドイツ系アメリカ人で、一八八八年九月二十一日アメリカのニューヨークに生れた。父はドイツ人教会音楽家で幼少より両親について音楽を学んだ。十二歳でハイスクールに入学、ニューヨーク市のピアノ教師カール・レーデルに師事、さらにオルガンも習得して十五歳でプロテスタント教会のオルガニストの地位を得て、地域の合唱団の指揮者ともなった。一九〇六年ベルリンの王立高等学校に入学、対位法をウオルフ教授に、管弦楽法をマックス・ブルッフ博士に、声乐をシタンゲ教授に就いて学んだ。明治四十二年(一九〇九)五月十九日、東京音楽学校の嘱託講師として来日、初めの契約で四十三年(一九一〇)八月三十一日まで声乐およびピアノ教師として雇入れられた。一カ月金四百円給与。同年九月二十三日付で四十五年(一九一二)八月三十一日の契約が成立した。四十三年(一九一〇)十一月二十二日身分は委任取扱いとなる(『外国人教師關係書類』明治三十二年～大正十一年)。

大正三年(一九一四)帰米、シカゴ音楽カレッジの教師をつとめ、その間にアメリカ各地を巡演、アメリカ作曲家の作品紹介に努力した。晩年はアメリカ音楽家協会会長をつとめた。

東京音楽学校時代の弟子には貫名美名彦、川久保美須々、石高テルらがいる。その他多くの英才を育てた。ロイテルは「四つ葉のクローバ」の作曲者としても知られている。この曲は明治四十五年四月二十六日の学友会男子部春季修学旅行演奏会のおり、千葉県師範学校において初演された。

在日中彼はピアニストとして幅広い演奏活動を行った。東京音楽学校主催以外の音楽会から二種類の批評を紹介しておこう。

〔明治四十二年十一月二十四日有楽座において〕

ロイテル氏音楽會

今春來任せし東京音楽学校教授ルドルフ、ロイテル氏は昨年獨逸伯林音楽學校を優等にて卒業し爾來同國樂壇を賑はせし齡未だ二十三の青年。ピアニストなるが今回其妙技を弘く内外人に聴かさんが爲め英獨米露の各國大使の賛助を得て十一月二十四日午後八時より有楽座に於て其演奏會を催せり、記者は既に兩三回同氏の妙技に接したるが今回は更に其手腕に敬服せり、曲目中。パカニイニヴワリエシヨンの如きは其テクニツクに於て到底凡手の企て及ばざる處なるが氏の鮮なる技術は遺憾なく是を演奏し得たりと云ふべく最後のリストのレゼンドは更に氏の非凡なる技術を證明するものと云ふべし。其他ベエトオヴエンのロンド。ドビュシイのサラバンデ。マクドエルのスコツチポエム何れも其々の感興をひけり。氏の樂風に於て最も注意すべきは手法極めて摯實にして些の輕佻の風を見ざることに、音の剛柔和聲の均衡音色の風趣に富める點にして形式美の諸點にあ

りては殆んど遺憾なし尙ほ内容美の詩的表現の充實は氏の年齢の前途と共に大なる進歩の期待を有するものと云ふべし。最後に記者は今回曲目中、ブラアムス。ストラウス。ドビュツシイ。サンサアン等の最新樂家の曲を載せられしを感謝す。

一、ピアノ獨彈

い、ガヴォツテ

パツハーサンサン

ろ、ロンド

ベトーフエン

(つゆまる)

ロイテル氏

二、ヴァイオロンチエロ、ピアノ合奏

ソナータ

リヒヤルド、ストラウス

ヴェルクマイステル氏

ロイテル

三、獨唱

い、アイヤ(サムソン、エンド、デリラ抜粹)

サンサン

ろ、マイネー、リーベ、イスト、グリユーン

ブラームス

は、四葉のくろぶアー

ロイテル

モリソン夫人

四、ピアノ獨彈

い、二前奏曲(と調及、い變調)

シヨパン

ろ、パガニニー、ヴェアリエーション

ブラームス

休憩十分間

ロイテル氏

五、ヴァイオロンチエロ獨奏

い、ヴェアリエーション、スインプオニツクス

ろ、エルゼンタンツ

ポツパー

ヴェルクマイステル氏

六、獨唱

い、死と少女

シューベルト

ろ、デル、シユレツケンベルゲル

ヴォルフ

は、フェルシユヴィーゲネヴ、リーベ

ヴォルフ

に、ウムゾンスト

ロイテル

ルーイス氏

七、ピアノ獨彈

い、サラバンデ

ドビュツスイ

ろ、スコツチ、ポエム

マツクドール

は、マルシ、ミニヨンネ

ボルデイニ

に、レヂエンド

リス

ロイテル氏

(『音楽界』第二卷十二号、明治四十二年十二月)

〔明治四十四年十一月二十六日、神田駿河台明治大学の新築講堂で女子音楽学校および日本音楽協会の同窓会主催で行われた音楽会〕

第三、ロイター氏のピアノ獨奏、曲はシヨパンのシエルツオ。技術の達者なのは矢張り感じの上にも影響する。私には氏の演奏でシヨパンのシエルツオが少しわかつた。

第五、ロイター氏のピアノ獨奏。これが當日の第一の出来だつた

らう。甲はチャイコフスキーのトロイカ、フハルト、東洋的色彩に富んだ美しい曲で、陰影と對照とに富み何とも云へない愉快な感じを與へる。あの輕妙なテクニクは見てゐただけでもたまらなくなる。バスが初めのテーマを繰り返してピアノで終るあたりは實によかつた。乙、ブラームスのセレナーデは作者に似合はないほど分りやすい、美しい曲である。シヨパンの作ではないかと思はれるくらいだつた。丙チャイコフスキーのカプリス、アラ、スカラティーであつたが、輕快巧妙を極めたテクニク、夢のとぼりを隔てゝフエヤリーの舞蹈でも見てるやうな、氣がした。喝采は堂を覆がへすばかりだつたのでアンコールにマクダウエルのシャドー、デームを弾かれた。晴れた十一月末の午後の蒼空を背景にして、強い北風になびく銀杏の梢、不平坦な窓硝子で凹凸つけられた外の建物の外廓線、赤い屋根瓦、ニコライの塔、これらのものが強い午後の光線を反射して莫迦に印象的に見える。何だかアンブレツシユニストの油畫でも觀てゐるやうな氣がした。これを觀ることもなしに見ながら氏のピアノを聽く、胸は躍らざるを得ないではないか。

〔音楽〕第三卷一号、明治四十五年一月